

第 1 章

解表剤（げひょうざい）

解表剤とは、辛散軽揚で発汗・解肌・透疹などの効能をもつ薬物を主体にして表証を解除する方剤であり、八法のうちの「汗法」に相当する。

肌表は人体最外側の防衛面で「藩籬」と称され、六淫外邪が侵襲するとまっ先に障害を受けて表証を呈する。この時期は邪が軽浅であり、解表法で肌表から邪を発散して外解すればよく、《素問・陰陽応象大論》の「その軽きによりてこれを揚ぐ」「その皮にあるは、汗してこれを発す」という原則に相当する。治療の時期が遅れたり、汗の出させ方が不適當であったり、治療の方法を誤った場合には、外邪が解さずに伝変して深入し他証に変生する。このことについて《素問・陰陽応象大論》には、「善く治するものは、皮毛を治し、その次は肌膚を治し、その次は筋脈を治し、その次は六腑を治し、その次は五臓を治す。五臓を治すれば、半ば死に半ば生くるなり」と指摘している。このことから、八法のうちで汗法がまっ先に挙げられている意味が分かる。

外邪には寒熱の違いがあり、人体にも陰陽の偏勝偏衰の違いがあり、風土・季節・気候も異なっているところから、解表剤は辛温解表と辛涼解表に大別され、さらに虚弱者の表証に対する扶正解表が区別される。

解表剤には辛散の薬物が多く配合されており、長時間煎じると薬性が耗散して効力が弱くなるので、煎出時間を短くする必要がある。また、服薬後には風や寒冷を避け被覆して、汗が出るのを補助すべきである。汗は一定時間にわたり全身にしつとりとかかせるようにする必要があり、部分的であったり短時間では邪を解除できず、したたるような大汗をかかせると正気が消耗する。汗の出させ方には十分な注意が必要である。

解表剤は外邪侵襲による表証に用いるが、表証と同時に裏実がみられるときには、先表後裏（まず解表し後に治裏する）あるいは表裏双解する必要がある。裏証のみの場合・麻疹が透発したとき・癰瘍が潰破したのち・虚証の水腫などには、解表剤は使用しない。

第1節 辛温解表剤（しんおんげひょうざい）

辛温解表剤は、風寒の邪による表寒証（風寒表証）の悪寒・発熱・頭痛・身体痛・口渇がない・無汗あるいは有汗・舌苔が薄白・脈が浮緊あるいは浮緩などの症候に用いる。

辛温で発散に働く麻黄・桂枝・荆芥・防風・蘇葉・葱白などの解表薬を主体に、宣肺・止咳・平喘などの薬物を加えて組成する。

桂枝湯（けいしとう）

《傷寒論》

[組成] 桂枝 9g 白芍 9g 炙甘草 6g 生姜 9g 大枣 6g

[用法] 水煎し分三で温服する。効果があれば中止する。

[効能] 解肌發表・調和營衛

[主治] 風寒表証（表寒表虚証）

悪風・発熱・頭痛・身体痛・汗が出る・鼻鳴・乾嘔・口渇がない・舌苔は薄白・脈は浮緩など。

[病機] 風寒の邪を感受し、風邪偏盛で開泄するために表疏營泄を呈する病態である。《傷寒論》では、太陽病中風と称する。

風寒の邪が肌表を侵襲して体表部（太陽）で邪正相争が生じ、衛陽が鬱阻されて体表を温煦できないので悪寒が生じ、邪正相争で変生した陽熱が表に洩れるので発熱し、邪が太陽の経脈（膀胱経）を阻滞して「通じざればすなわち痛む」で頭痛・身体痛を呈する。ただし、軽揚開泄の性質をもつ風邪が偏勝であり、風は陽邪で化熱しやすいために、陽鬱は軽度で悪寒はつよくな^{おふう}く悪風（風に当たったり衣服を脱ぐと寒けがする）を呈し、初期から発熱がみられる。風邪が汗孔を開泄して營陰が外泄するので、汗が出る。風邪は上部を犯しやすいので頭痛がある。肺胃に内通している衛気が擾乱されており、肺気が阻滞されると肺竅である鼻の通りが悪くなって鼻鳴（鼻声や鼻がグスグスいう）が、胃気が上逆すると乾嘔が生じる。邪が化熱入裏していないので、舌苔は薄白で口渇はない。邪正相争が表でおこっており、正気が表に向かうために脈は相応に

浮を呈するが、営陰が外泄しているので脈の充盈度が不足して緩脈になる。《傷寒論》には「陽浮にして陰弱」とあり、浮脈ではあるが沈取すると無力であることを指摘している。風寒表証で表疏営泄を呈するところから、「表寒表虚」とも称される。

なお、正常では衛陽が外を固摂して営陰を内守し、衛陽は営陰に依附して周流しており、両者は協調し相互に依存しあって「営衛調和」を維持している。風寒の邪が肌表を犯して衛陽を開疏し、営陰が固摂されなくなって外泄している状態は、営衛の協調関係が失調した「営衛不和」であり、《傷寒論》では「衛強営弱」と称している。すなわち、邪が肌表で衛氣と相争していることが「衛強」であり、営陰が外泄して脈を充盈できないことが「営弱」である。

【方意】解肌発表により邪を除き、営衛生発の源である中焦を振奮させて、営衛を充実させ調和させる。

主薬は辛温の桂枝で、通陽散寒により風寒を発散して除き、「衛強」を解消する。酸収の白芍は、益陰斂営に働いて営陰の外泄を止め、「営弱」を防止する。辛温の生姜は、辛散により表邪の発散をつよめて桂枝を補助するとともに、胃気を下降させて止嘔する。甘平の大棗は滋営して白芍を助ける。生姜・大棗の配合は、脾胃を昇発し営衛を補充し振奮させる。炙甘草は諸薬を調和すると同時に、辛味の桂枝・生姜とともに辛甘扶陽に、酸味の白芍とともに酸甘化陰に働き、陰陽を補充して調和させる。全体で風寒を散じ営陰を斂摂し、営衛を補充・振奮して調和させ、「仲景群方の魁さきがけたり、すなわち滋陰和陽し、営衛を調和し、解肌発汗の総方なり」と称される。

【参考】

- ①《傷寒論》には、「太陽病、発熱し、汗出で、悪風おふうし、脈緩のものは、名づけて中風となす」「太陽の中風、陽浮にして陰弱、陽浮のものは、熱自ずと発し、陰弱のものは、汗自ずと出づ、奮しよくしよく奮せきせきと悪寒し、淅淅と悪風し、翕きゆう翕きゆうと発熱し、鼻鳴り乾嘔するものは、桂枝湯これを主る」「太陽病、頭痛、発熱し、汗出で、悪風するものは、桂枝湯これを主る」とあり、表疏営泄の症候が述べられている。

本方の服用法としては以下のような注意が必要である。

「……寒温かなを適え一升を服し、服しおわり須臾しゆゆに、熱稀粥一升余りを啜り、もって薬力を助く。温覆すること一時許ばかりせしめ、遍身に漿らゆう漿ちゆうと徹しく汗あるに似たるもの益ますます佳なり、水の流りゆう漓りするごとくせしむべからず、病必ず除かず。もし一服し汗出でて病差ゆれば、後服を停む、必ずしも劑を尽さず。もし汗せざれば、更に前法に依り服し、また汗せざれば、後服は小しくその間を促し、半日許に三服を尽さしむ。もし病重きものは、一日一夜服し、周時これを観る、一劑を服し尽し、病証なお在るものは、更に服を作す、もし汗出でざれば、すなわち服すこと二三劑に至る。生冷、粘滑、肉麵、五辛、酒醲、臭悪などの物を禁ず」

とあるように、全身にしつとりと汗をかかせる必要があり、そのためには衣服で温かく覆い、粥などをすすって薬力を助け、汗が出るまで服薬を続ける必要がある。ただし、流れるように汗をかかせると、効果がないだけでなく、変証をおこすことになる。

- ②《医宗金鑑》には「およそ風寒表に在り、脈浮弱にて自汗出づるは、みな表虚に属す、桂枝湯によるしくこれを主る」「名づけて桂枝湯というは、君は桂枝をもってすればなり。桂枝は辛温、辛よく散邪し、温は陽に従いて衛を扶く。芍薬は酸寒、酸よく汗を斂し、寒は陰に走きて營を益す。桂枝は芍薬に君するは、これ発散中に斂汗の意を寓す、芍薬は桂枝に臣するは、これ固表中に微汗あるの道なり。生姜の辛は、桂枝を佐けて肌表を解す、大棗の甘は、芍薬を佐けて營裏を和す。甘草の甘平は、内を安んじ外を攘うの能あり、用いて中気を調和し、即ち表裏を調和し、かつ諸薬を調和するなり。枝・芍これ相い須け、姜・棗これ相い得、甘草の陽表陰裏を調和するを借りて、氣衛血營は、並び行りて悖わず、ここに剛柔相濟けて和をなすなり。しかして精義は服後須臾に熱稀粥を啜りて薬力を助くるに在り。けだし穀氣内に充ちれば、ただ醸汗をなし易きのみならず、更に已に入るの邪をして少しも留むるを得さしめず、まさに束するの邪は復た入るを得ざるなり。また妙は温覆すること一時許ならしめ、熨熨と微しく汗あるに似たるに在り、これ人に微汗の法を授く。水の流瀉するがごとくならしむべからず、病必ず除かずは、人に過汗すべからざるの意を示すなり。この方は仲景群方の冠たり、すなわち解肌発汗、調和營衛の第一の方なり。およそ中風・傷寒、脈浮弱、汗自ずと出でて表解せざるもの、みな得てこれを主る。その他ただ一二証を見れば即ち是、必ずしも悉くを具えず」と解説している。

- ③本方は中焦を昇発し營衛・陰陽を調和し充盈させるので、内傷雑病に対しても有効であり、「桂枝湯、外証これを得れば、解肌をなし營衛を和し、内証これを得れば、化気をなし陰陽を和す」といわれる。

病後・産後・虚弱者などで、外感病ではなくて発熱・自汗・悪風寒などの營衛不和を呈するとき有効である。

- ④本方は表実無汗・表寒裏熱・表熱有汗などには使用してはならない。
⑤《傷寒論》では桂枝湯のさまざまな加減方を提示しており、表証と関連のある方剤は以下のようである。

◎桂枝加厚朴杏子湯（けいしかこうぼくきょうにんとう）

（別名：桂枝加厚朴杏子湯）

組成：桂枝湯に厚朴・杏仁各6gを加える。水煎分三。

効能：解肌祛風・降氣定喘

「喘家、桂枝湯を作すは、厚朴杏子を加えて佳し」「太陽病、これを下し微しく喘するものは、表いまだ解せざるが故なり、桂枝加厚朴杏子湯これを主る」

平素から喘咳（呼吸困難・咳嗽）を呈するものが風寒を感受するか、表証に誤って下法を使用したために風寒が内陷して肺気を阻滯し、喘咳が生じたときに、下気平喘・宣肺の厚朴・杏仁を配合する。

◎桂枝加葛根湯（けいしかかっこんとう）

組成：葛根 12g，桂枝 6g，白芍 6g，炙甘草 6g，生姜 9g，大棗 6g。水煎分三。

効能：解肌舒筋

「太陽病，項背強ばること几几^{きき}，反って汗出で悪風するものは，桂枝加葛根湯これを主る」

桂枝湯証と同時に項背部のこわばりがみられる。風邪が太陽の表だけでなく陽明肌腠にも侵入し，陽明の昇清達外を阻滯して津液の布散ができず，筋肉が濡養されないためにこわばる。本方は，桂枝湯の桂枝・白芍を減量して葛根を加えたものに相当する。桂枝湯で太陽風寒を除き，葛根を加えて陽明肌腠の邪を外解し清陽を鼓舞して津液を外達させる。なお，原著には「麻黄三两」が配合されているが，葛根湯と区別するうえで，一般には「麻黄は不要である」と解釈されている。

◎葛根湯（かっこんとう）

組成：葛根 12g，麻黄 9g，桂枝 6g，生姜 9g，炙甘草 6g，白芍 6g，大棗 6g。水煎分三。

効能：解肌発汗・舒筋

「太陽病，項背強ばること几几，汗無く，悪風するは，葛根湯これを主る」
「太陽と陽明の合病は，必ず自下利す，葛根湯これを主る」

本方は桂枝加葛根湯に麻黄を加えたものであり，桂枝加葛根湯証は「反って汗出で悪風す」という表疏營泄の病機であるのに対し，本証は「汗なく，悪風す」の表閉營鬱を呈しているために，開表発汗の麻黄を加えてつよく散邪する。

太陽と陽明の合病は，風寒が太陽・陽明の肌表を侵襲して表を閉じるために，邪正相争による壅熱が外泄できずに内逆して大腸に下迫し，下痢をひきおこしている。葛根湯で太陽・陽明の肌表を開き解邪すれば，熱が外透して下迫しなくなり下痢が止む。

◎葛根加半夏湯（かっこんかはんげとう）

組成：葛根湯に半夏 9g を加える。水煎分三。

効能：解肌発汗・舒筋・和胃降逆

「太陽と陽明の合病，下利せず，ただ嘔するものは，葛根加半夏湯これを主る」

太陽と陽明の合病で壅熱が外泄できずに内逆し，大腸には下迫せず（下利せず）に，胃に逆して嘔吐をひきおこした状態である。葛根湯で太陽・陽明の表を開き，降逆止嘔の半夏で胃気を和降する。

◎桂枝加附子湯（けいしかぶしとう）

組成：桂枝湯に炮附子6gを加える。水煎分三。

効能：調和営衛・扶陽解表

「太陽病，汗を發し，遂に漏れ止まず，その人惡風し，小便難く，四肢微しく急し，もって屈伸し難きものは，桂枝加附子湯これを主る」

表証に対して汗を出しすぎたために，氣津が外泄して邪が残り，惡風という表証があり，陽氣と津液による温煦濡潤が不足して尿量減少・四肢のひきつりが生じ，とくに傷衛による漏汗が甚だしい。扶陽の附子で陽氣を扶助し，実衛固表して汗を止め，同時に津液の産生と布散を促進するとともに，桂枝湯で解表・調和営衛を行う。

◎桂枝去芍薬湯（けいしきょしゃくやくとう）

組成：桂枝湯から白芍を除く。水煎分三。

効能：宣通胸陽・祛風解肌

「太陽病，これを下して後，脈促，胸滿のものは，桂枝去芍薬湯これを主る」

主治は太陽中風証に胸陽不足証を兼ねる。表証に誤って下法を用いたために，邪が胸中に陥入して胸陽が阻まれ，胸が脹って苦しい症状があらわれている。表証はまだ残り，「脈促」で邪に抵抗する勢いがあるので，収斂の白芍を除き，辛甘の桂枝・甘草・生姜・大棗で胸陽を温通し，営衛を振奮させて邪を除く。

◎桂枝去芍薬加附子湯（けいしきょしゃくやくかぶしとう）

組成：桂枝去芍薬湯に附子6gを加える。水煎分三。

効能：宣通胸陽・温陽解表

「もし微しく寒えるものは，桂枝去芍薬加附子湯これを主る」

桂枝去芍薬湯証で陽氣の損傷がさらに強く，温煦が不足して四肢の冷えがみられるときには，さらに附子を加えて温陽する。

◎桂麻各半湯（けいまかくはんとう）（別名：桂枝麻黄各半湯）

組成：桂枝5g，白芍・生姜・炙甘草・麻黄各3g，大棗2g，杏仁3g。水煎分三。

効能：發汗解表・平喘

「太陽病，これを得て八九日，瘧状のごとく，發熱惡寒し，熱多く寒少なく，その人嘔せず，清便自可せんと欲し，一日二三度發し，脈微緩のものは，癒えんと欲すとなすなり。脈微にして惡寒するは，これ陰陽ともに虚す，更に汗を發し，更に下し，更に吐すべからざるなり。面色に反って熱色あるものは，いまだ解せんと欲せざるなり，その小しく汗出づるを得ることあたわざるをもつて，身は必ず痒し，桂枝麻黄各半湯によるし」

本方は桂枝湯と麻黄湯の各1/3量をあわせたものである。風寒表邪が残存しているが軽微になっている状態で，表閉で陽熱が鬱して顔が赤く，風邪が外泄

しかけて身体の瘙痒が生じているので、外泄の機に乗じて発汗解表する。桂枝湯では解し得ず、麻黄湯では峻泄にすぎるので、両方の1/3量をあわせて「小しく汗を発する」のがよい。

◎桂枝二麻黄一湯（けいしにまおういっとう）

組成：桂枝5g，白芍3.3g，麻黄2g，生姜3.3g，杏仁2g，炙甘草3g，大棗2g。水煎分三。

効能：発汗解表・平喘

「桂枝湯を服し、大いに汗出で、脈洪大のものは、桂枝湯を与うること、前法のごとくす。もし形は瘧ぎやくに似、一日に再発するものは、汗出でて必ず解す、桂枝二麻黄一湯によるし」

本方は桂根湯が2で麻黄湯が1の比率で、全量の2/3をあわせたものに相当する（桂枝湯が1/3強で麻黄湯が1/3弱になる）。大いに発汗したが、表邪が残存して悪寒・発熱が残っている状態で、少量の桂枝湯では祛邪できないので少量の麻黄湯をあわせ、「小剂量」で「小しく汗を発し」て解邪する。

◎桂枝二越婢一湯（けいしにえっぴいっとう）

組成：桂枝・白芍・麻黄・炙甘草各2g，大棗1.5g，生姜3g，石膏3g。水煎分二。

効能：発汗解表・清裏熱

「太陽病，発熱悪寒し，熱多く寒少なく，脈微弱のものは，これ陽なきなり，汗を発すべからず，桂枝二越婢一湯によるし」

本方は桂枝湯の1/4量と越婢湯の1/8量をあわせたものである。風寒表邪があり，陽熱内壅をともなって熱多寒少になっている状態であり，桂枝湯加麻黄で表邪を散じ石膏で内熱を清する。ただし量が少ないので「小しく汗を発す」である。「汗を発すべからず」とあるのは，通常の量でつよい発汗をさせてはならないことを指している。桂枝湯で解肌祛風し，越婢湯で発越鬱陽し，表裏双解の軽剤である。

◎桂枝加芍薬生姜各一兩人参三両新加湯（けいしかしゃくやくしょうきょうかくいちりょうにんじんさんりょうしんかとう）

桂枝新加湯とも略称する。

組成：桂枝9g，白芍12g，炙甘草6g，人参9g，生姜12g，大棗6g。

効能：調和営衛・益気 and 営

「汗を發して後，身疼痛し，脈沈遅のものは，桂枝加芍薬生姜各一兩人参三両新加湯これを主る」

太陽病で発汗しすぎて，気営両傷となったために，身体疼痛，脈に沈遅があらわれる。桂枝湯で営衛を調和し，通陽解肌する。大量の白芍で益陰養血して痛みをしずめ，大量の生姜で陽気を宣通し，さらに人参を加えて補気生津する。

気血を回復させ、営衛を調え、全体として扶正祛邪する。

附 方

1. 桂枝加黄耆湯（けいしかおうぎとう）《金匱要略》

組成：桂枝湯に黄耆 6g を加える。水煎服。

効能：調和営衛・通陽祛湿

主治：湿鬱衛虚の黄汗。

「もし身重く、汗出でおわりたちまち軽きは、久久に必ず身^{ようかん}潤し、潤すればすなわち胸中痛む、腰より以上必ず汗出で、下は汗なく、腰髀弛痛し、物の皮中にあるがごとき状、劇しきは食することあたわず、身は疼重煩躁し、小便利せず、これ黄汗たり、桂枝加黄耆湯これを主る」とある。湿鬱が中・下焦でつよいために身体が重だるく痛む・皮下を虫がはうような感じ・食べられない・尿量が少ないなどを呈し、陽気を閉鬱すると煩躁・不眠が生じる。上半身は衛虚のために汗が出るが下半身は湿鬱で汗が出ず、汗が出ると湿が外泄して身体が軽くなるが、出すぎると陽気を損傷して筋肉がびくびくひきつる。汗により着衣が黄染するので黄汗という。桂枝湯で営衛を調和し通陽し、益気固表・祛湿の黄耆で湿を除き衛気を固める。

本方は、黄汗にかぎらず、営衛不和で表虚が明らかな場合に使用するとよい。

2. 桂枝加朮附湯（けいしかじゅつぷとう）《吉益東洞》

組成：桂枝・白芍・大棗・生姜・蒼朮各 4g，甘草・附子各 3g。水煎服。

効能：調和営衛・散寒祛湿

主治：寒湿痺による関節痛・冷えなど。

本方は桂枝湯に附子・蒼朮を加えたものであり、附子は通陽散寒の桂枝を補助し、蒼朮は湿邪を除く目的で加えられている。桂枝湯証に寒湿による強い疼痛・むくみ・冷えなどが加わった病態に適する。さらに、むくみ・めまい・筋肉がびくびくひきつるなど水湿の症状が顕著なときは、利水の茯苓を加えた桂枝加苓朮附湯（けいしかりょうじゅつぷとう）を使用する。

また、筋肉のこわばり・無汗などを伴う場合には、桂枝湯に代えて葛根湯を用いた葛根加朮附湯（かつこんかじゅつぷとう）を応用する。

3. 桂枝加桂湯（けいしかけいとう）《傷寒論》《金匱要略》

組成：桂枝 15g，芍薬 9g，生姜 3g，炙甘草 6g，大棗 6g。水煎服。

効能：散寒降衝・和営止痛

《傷寒論》に「燒針にてその汗を發せしめ、針せし処寒を被り、核起こり